

1 保育の計画性

月案、週日案に加え、2021 年度は保育マップ型記録を導入できたことは、大きな成果である。同時多発的に展開する遊び状況を把握し、適時妥当な援助を導く上で、専門性の高い記録法であり、これによって明日の保育を具体的にイメージすることができる。本園の質の高さを象徴するもののひとつである。

一方で、週日案について月曜日に書いて終わりになり、記録として毎日を紡いでいない実態が見られた。様式を変え、指導案が自分の保育に位置づくようトレーニングしていきたい。また、似たようなことを何度も書かなくてはならないところがあり、多くの時間を割いてしまうことになっていたので、月案についても、現実的な様式に変更した。保育者の負担を減らし、実質的に生きる指導計画の在り方にかえていきたい。

2 保育の在り方、幼児への対応

毎日、生活場面で逸脱を繰り返す年長児が何人もおり、改めて認知面での支えや本人の困り感の早期発見、個別対応の大切さを学んだ。「分からない」ことに対する自覚が本人になく、なんとなく 3 歳、4 歳を過ごしていたことが考えられる。絵本を読むとき、生活の切り替え場面、活動の変わり目など、分からなさを抱えやすい場面で困っている子どもを見つけて、丁寧に指導していくことが求められる。

絵カードの導入をはじめ、全体に、基本的な生活の手順を知識として分かりやすく伝えることを第一にし、そこから個別対応を丁寧にしていく流れが必要である。

3 保育者としての資質や能力・良識・適性

何をどこまで求めていいのか、相変わらず難しい。子どもに発達段階があるように、保育者にも発達段階がある。一人一人の保育者の見えていること、見えていないことを理解し、発達段階と個性に応じた育成ができる保育者集団になっていくことが課題である。

4 地域の自然や社会とのかかわり

本園所有のすくすくの森で、植物や虫などにかかわり、豊かな自然体験活動を重ねている。2 歳児は、みのむしに興味を持ってかかわり、年少児は、さまざまな木の実を割って、断面に興味を持ってかかわった。年中児は、虫に興味を持ち、細かな部分まで観察することを楽しんだ。年長児は、種に焦点を当て、種類やその仕組みに興味を持ってかかわることができた。

2021 年度も、昨年度に引き続き、コロナ対策のため、保幼少連携事業を具体的に行うことができなかった。地域連携協議会の役員や、地域の防災、人権イベントについても、同じく活動が難しかった。

5 研修と研究

新人保育者養成について、大妻女子大学の岡先生に引き続きご指導いただくことができた。また、生

活発表会については、共立女子大学の田代先生にご指導いただくことができた。今年も、事前に生活発表会の練習を動画で送り、それについてズームでコメントを頂いた。具体的な解決策や気づけなかったことを指摘して頂き、具体的に劇を改善していくことができ、大きな成功につながった。

コロナ禍で、研修会自体が開かれない状況ではあったが、それぞれがキャリアに応じて県主催の研修を受けることができている。一人一人の保育者が、説得力を持って、自分の保育を語るができるようになることが、引き続き課題である。